國体に關する異說に就て

法曹聯盟理事　林　逸郎

私は故上杉博士の門弟であり、機關說問題には二十年間關つて來た。上杉博士の愚師である穗積博士の臨終には上杉博士は遂に間に合はなかつたが若し間に合つたとするならば恐らく邪說に對し撃滅の檄を公ぜよ、然らずんば世は足利尊氏時代の如くなるぞと言はれた事を信ずる。

天皇機關說はドイツの君主機關說の直輸入である。吾々はドイツの二の轍を踏まれたが爲に決死的戰を續けて來たのだ。日本とは言はぬが斯る邪說を支持して流布する政治家は君主に近づきそれに代らんとするのではないかとの疑を持たざるを得ない。一木博士に私淑した美濃部博士の後には青蠅、末弘博士が出てゐる。吾々は東京、京都兩大學の外國思想に溺學

財團法人 協調會福岡出張所

した邪惡學說に對し鬪爭を續け、文部、司法當局を輾轉し、末弘博士、河上博士、瀧川教授問題等の枝葉を斷ち遂に一木美濃部學說から特權階級の思想を再檢討する迄に押進め學術的研究に到達したる處これが貴族院で問題となつたのである菊池男の質問に對する岡田首相の答辯を聞いて決死的鬪爭に邁進せんと準備した。形式法學では駄目だ、道德、倫理に根本を置かねばいけない、美濃部學說は根本に問題がある心魂の修正を求むる。明治四十四年教員講習會の憲法講話に對しては穗積、上杉兩博士は權力反對されたがその內容はロシヤ以上の事が書かれてある。この美濃部博士が昭和七年當時の一木宮相により陛下に御進講申上てゐる、美濃部を國賊と信ずるが故に其の當時の一木博士も國賊と信ずる事が出來る又美濃部は治安維持法は惡法なりと言ふたがかくの如きに至つて

財團法人 協調會福岡出張所